

What's New

研究プロジェクト「外来野生動物等による新たな農林被害防止技術の開発」の紹介

野生動物研究領域 鳥獣生態研究室長 小泉 透

野生動物による新たな農林業被害が問題となっています。アライグマ、ハクビシン、ヌートリアによる平成15年度の農作物被害は3.3億円に達し、前年の被害金額に比べ約1.5倍になるなど急速に被害が拡大しています。また、二ホンジカによる壮高齢人工林剥皮被害は西日本を中心にほぼ全国的に発生しており、熊本県では林齢11年以上のヒノキ人工林の80%に剥皮被害が発生しています。こうした「想定外」の被害では、早急な対応が求められる反面、被害に関わる基本的な知見に乏しく、過去の取り組み事例が少なく技術の蓄積に乏しいという問題が指摘されています。

このような背景をふまえ、森林総合研究所では農林水産技術会議事務局より「先端技術を活用した農林水産研究高度化事業」の委託を受け、平成18年度より3年間の計画で「外来野生動物等による新たな農林被害防止技術の開発」の研究プロジェクトを開始することになりました。森林総合研究所を含め、公立研究機関、大学、独法、民間会社、NPO法人が参加しています。この研究プロジェクトでは、「加害動物の生物学的特性を応用し動物被害に対応した経営方式を確立することにより、被害防止効果を長期に持続させる技術を開発する」ことを目的とし、「動物インパクト低減のための技術基盤の確立」、「農地被害の軽減技術の開発」、「被害リスクに対応した経営管理技術の開発」という3つの達成目標に沿って13の研究課題を実施します。被害発生地における対応技術とともに、被害発生のおそれのある地域における先行防除に有効な技術を開発することが期待されています。

研究の流れ

外来野生動物等による新たな農林被害防止技術の開発



写真提供：兵庫県人と自然の博物館、埼玉県農林総合研究センター古屋益朗氏